

第2章 史跡綴喜古墳群を取り巻く環境

第1節 地理的環境

(1) 位置

京田辺市は、北緯 $34^{\circ} 48' 52''$ 、東経 $135^{\circ} 46' 04''$ 、京都府の南西部にあって、南山城地方の中央やや西寄りに位置している。東は木津川を挟んで城陽市、綴喜郡井手町と接し、西は生駒山系により大阪府枚方市、奈良県生駒市と境を分かち、北は八幡市、南は相楽郡精華町と接している。市域は、東西 5.5km、南北 10.9km で総面積は 42.92 km^2 となっている。府庁所在地である京都市より約 22 km、大阪の都心部より約 28 km、奈良市へ約 15 km の位置にある。

鉄道は、市域内に JR 学研都市線(片町線)、近鉄京都線が敷設され、JR は松井山手駅、大住駅、京田辺駅、同志社前駅、JR 三山木駅の 5 駅、近鉄は新田辺駅、興戸駅、三山木駅、近鉄宮津駅の 4 駅があり、京田辺駅から京橋駅(大阪)まで約 40~50 分、新田辺駅から京都駅まで約 20~30 分で到達する。

道路交通面では、市域内を新名神高速道路及び一般有料道路である第二京阪道路(国道 1 号)、京奈和自動車道(国道 24 号)が通り、京田辺松井 IC、田辺北 IC、田辺西 IC が設けられている。国道は国道 1 号バイパス、国道 307 号が通る。府道は主要地方道として府道 22 号八幡木津線、山手幹線、府道 65 号生駒井手線、府道 71 号枚方山城線が、一般府道として府道 251 号富野荘八幡線、府道 736 号交野久御山線、府道 801 号京都八幡木津自転車道線が通り京都、大阪、奈良へ連絡している。

また、今後は新名神高速道路の全線開通や北陸新幹線の新駅設置などが予定されており、更なる飛躍の可能性を秘めている。

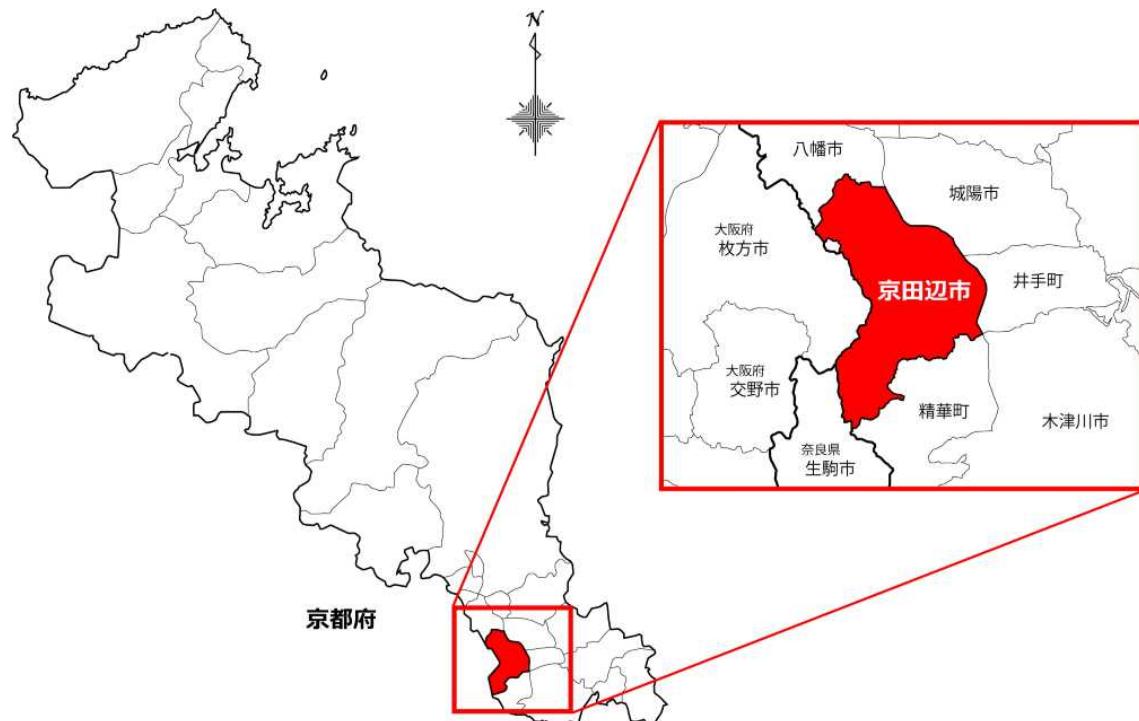


図 12 京田辺市の位置

第2節 自然的環境

(1) 気候

本市は、京都府の南西部に位置し、市域の東側は木津川に面した平野部、西は生駒山系から北に延びる丘陵地で「瀬戸内式気候」に属し年間を通じて比較的温暖な気候が特徴である。

【一般的な気象状況】

① 気温

平成24(2012)年から令和3(2021)年までの過去10年間の年平均気温は15.7°Cで、この間の最高気温は令和元年の40.1°C、最低気温は平成24年の-6.1°Cであった。

② 風

全般に風は弱く、過去10年間の平均風速は1.5m/secであった。いずれの気圧配置においても強風の出現は少ないといえるが、時折、台風、低気圧、前線、季節風を原因とした局地的な強風がみられる。

なお、年間の最多風向は西南西の風向きが他の風向きより多くなっているのが特徴である。

③ 降水量

過去10年間の年平均降水量は1,566.9mmである。また、この間の一日当たりの最大雨量は平成29年の154.5mm、平均降水日数は114日であった。

表2 過去10年間の気象概況

区分 年次	気温(°C)			降水量(mm)		降水日数 (1mm以上)	風向・風速(m/sec)		
	平均	最高	最低	総量	日最大雨量		平均風速	最多風向	最大風速
平成24年	14.7	37.5	-6.1	1,601.0	132.5	101	1.5	西南西	21.8
25年	15.1	38.3	-4.4	1,700.0	149.0	113	1.5	西南西	21.7
26年	14.7	37.5	-4.0	1,340.5	153.5	108	1.5	西南西	23.0
27年	15.3	38.4	-3.2	1,694.0	106.0	136	1.4	西南西	22.7
28年	16.3	37.8	-5.5	1,619.5	128.5	121	1.4	東南東	16.3
29年	15.0	36.6	-2.9	1,550.5	154.5	113	1.4	西南西	22.4
30年	16.3	39.9	-4.7	1,515.5	112.0	118	1.6	西	31.6
令和元年	16.3	40.1	-3.0	1,303.0	109.0	99	1.6	西	19.3
2年	16.5	39.3	-2.9	1,518.0	74.5	116	1.5	西南西	23.6
3年	16.4	38.5	-5.7	1,826.5	87.5	116	1.6	西南西	21.2
平均	15.7	—	—	1,566.9	—	114	1.5	—	—

資料：『京田辺市統計書(平成25年度版～令和4年度版)』

(2) 地形

京都府南部の山城地域の中央部には、南北約20km、東西5～6kmのほぼ長方形を呈する山城(京都)盆地が所在する。山城(京都)盆地の北部を北から南に流れるのが桂川及び鴨川、中央部を東から西に流

れるのが宇治川、南部を南から北に貫流するのが木津川で、淀川の三支川を形成する。

木津川は、鈴鹿山脈や布引山地に源を発する流路延長 99 km、流域面積 1,596 km²の河川で、木津川流域最大の湖盆である山城盆地では、約 100~120 万年前に井手断層と田辺断層が動き、木津川が南北に流れる谷ができたとされる。

京都市域及び桂川右岸の乙訓地域を除いた南山城地域の木津川左岸は、生駒山地及びその延長で北北東に延びる交野山地の東側斜面がゆるやかな丘陵地となっている。丘陵地北端の八幡市域の丘陵は八幡

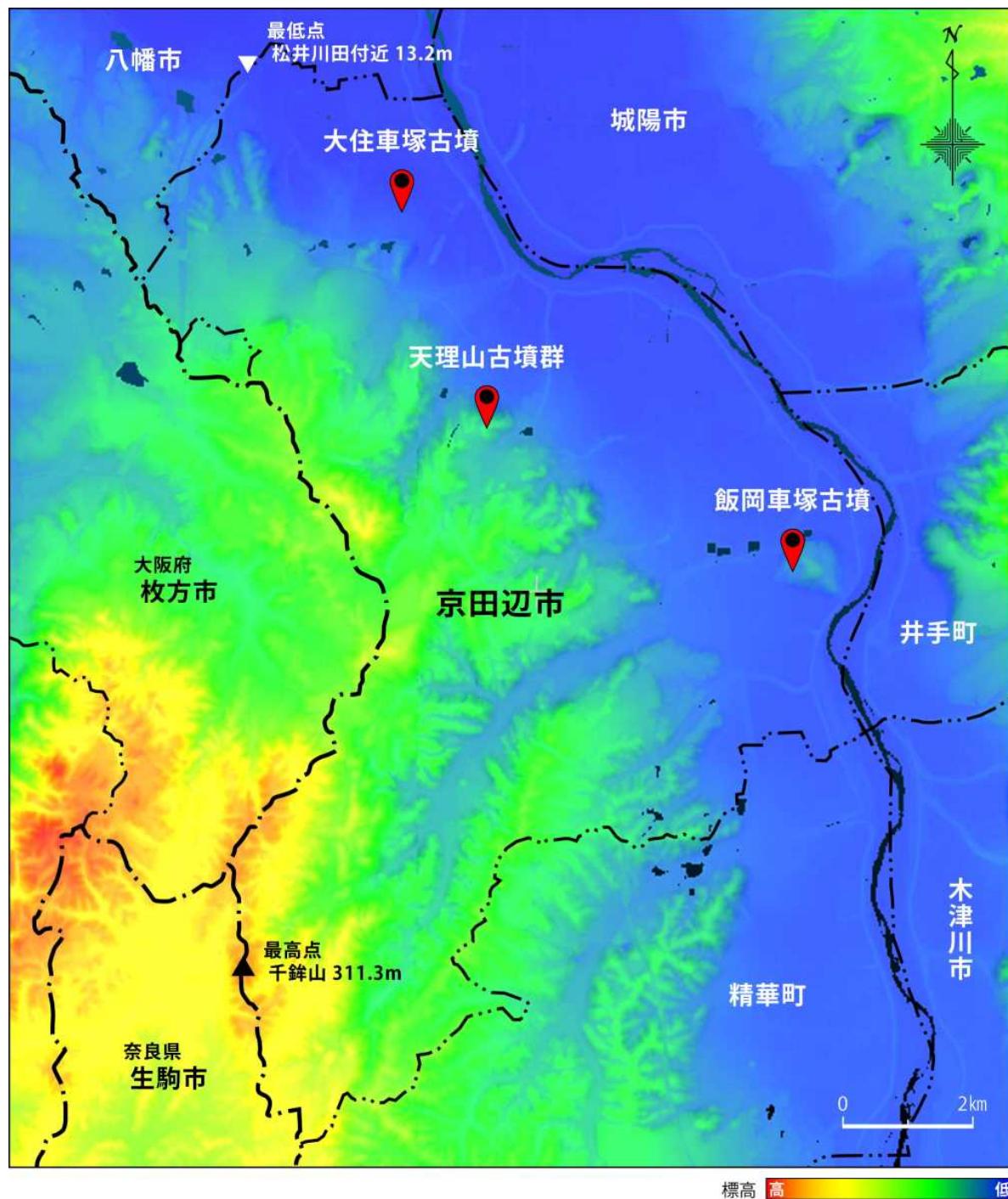


図 13 京田辺市の地形段彩図(国土交通省国土地理院が管理する航空レーザ測量データより作成)

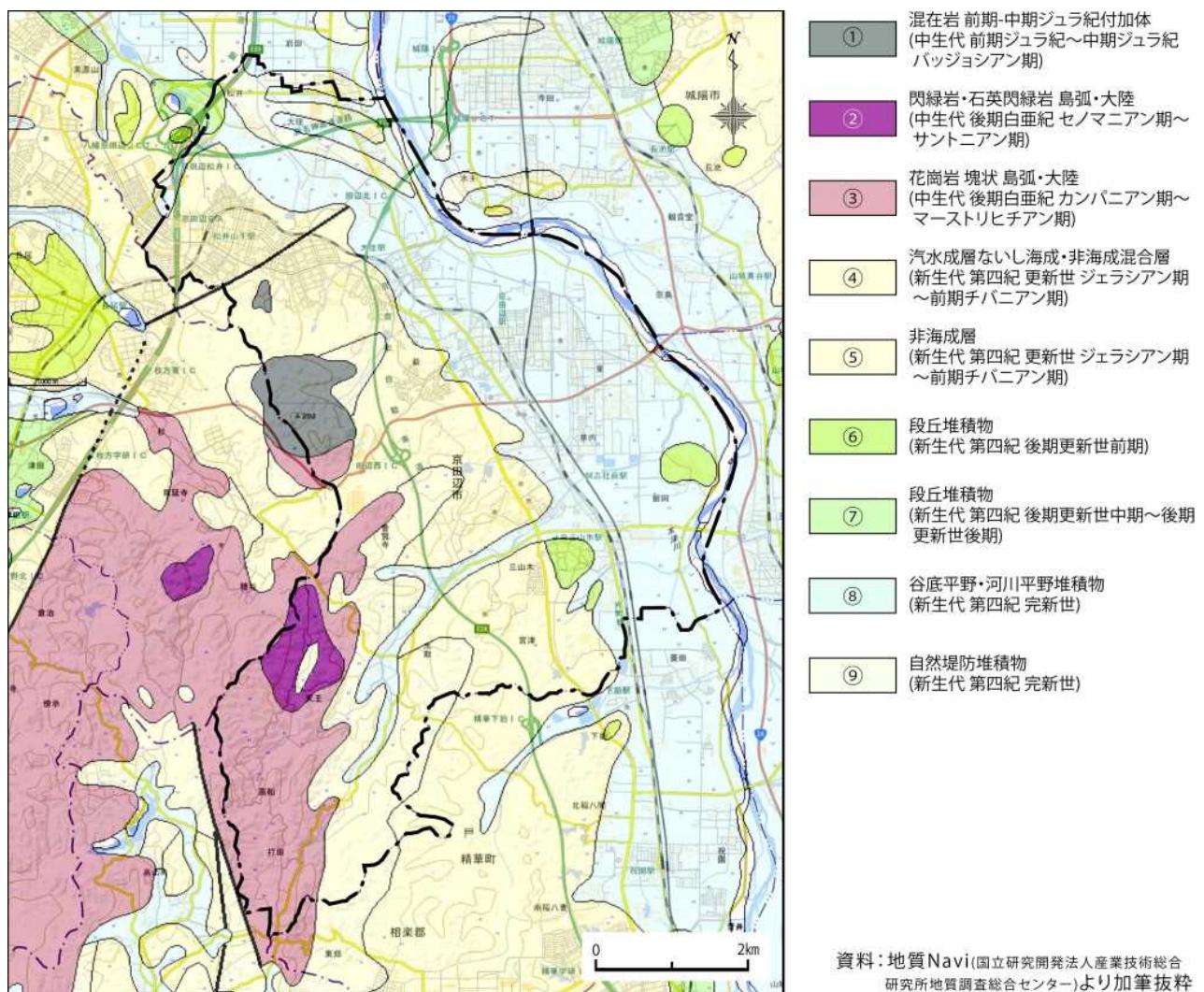
丘陵(男山丘陵)と呼称され、本市から精華町にかけて広く発達する丘陵地形が田辺丘陵である。綴喜古墳群はこの八幡丘陵から田辺丘陵にかけて立地している。

このように本市の地形は、西部が生駒山系に連なる田辺丘陵であり、東部は木津川のつくりあげた沖積地からなる低地の谷底平野や自然堤防が分布している。天理山古墳群や大住車塚古墳はこの丘陵地やその先端の緩傾斜地に位置し、飯岡車塚古墳は木津川に隣接した独立丘陵上にある。

(3) 地質

京都府南部の南山城地域の地質は、中生代のジュラ紀(約2億年前～1億4,500万年前)に堆積した丹波帯(砂岩・粘板岩・泥岩・礫岩・チャート主体の堆積岩：図14の①)及び中生代の白亜紀後期(約1億年前～6,600万年前)に併入した花崗岩類(深成岩：図14の②③)を基盤岩とする。

本市から精華町にかけて広く発達する田辺丘陵では、大阪層群(図14の④⑤)と呼ばれる鮮新世後期(360万年前～260万年前)から更新世前期(約260万年前～77万年前)に堆積した未固結の礫・砂・粘土



資料：地質Navi(国立研究開発法人産業技術総合
研究所地質調査総合センター)より加筆抜粋

図14 京田辺市周辺の地質図

がこれらの基盤岩を厚く被覆して分布している。また、丘陵地の裾周辺では更新世中期(約 77 万年前～13 万年前)から更新世後期(約 13 万年前～1 万年前)に堆積した高位・中位・低位段丘堆積物(図 14 の⑥⑦)が小規模に分布する。各段丘堆積物は未固結の河川堆積物で礫・砂・粘土からなる。

木津川沿いに形成された沖積平野(谷底平野・自然堤防)では、木津川の運搬堆積物(沖積層、礫・砂・粘土：図 14 の⑧⑨)が基盤岩・大阪層群・段丘堆積物を被覆して厚く分布している。

周辺の大阪層群は、田辺累層に属した地層が広く分布し、礫主体の水取礫層および砂と粘土の互層を主体とする柘榴互層に細分される。

表 3 京田辺市周辺の地質層序

年代 100 万年	地質年代	堆 積	火成活動 变成作用	地 史
0.01	完新世	完新統 (沖積層)	沖積平野の形成	活断層の発達 (奈良坂撓曲・木津川断層)
0.13	第 四 紀	中・低位段丘堆積物	段丘の形成	N-S逆断層群 の形成
0.77	更 新 世	高位段丘堆積物		NE-SW逆断層 群の形成
2.6	新 世	精華累層 田辺累層 登美ヶ丘累層	大阪層群	奈良盆地と京都 盆地の形成
3.6	生 代	古琵琶湖層群 伊賀累層 大福礫層 北又礫層 ソノハ礫層 信楽礫層		
5.3	第 三 紀			
11.6	中 新 世	地獄谷累層 *藤原層群	■ 三笠安山岩 ■ *室生火碎流堆積物	陸成層の堆積と 瀬戸内火山岩類の噴出 主に海成層の堆積
16.0	古 第三 紀			
66.0	白 堺 紀	接触 变成岩類 領家 变成岩類	新期 領家花崗岩類 古期 領家花崗岩類	酸性深成岩類 の貫入 接触变成作用 高温低压型变成作用
100.5	中 生 代		門緑岩類	
145.0	ジ ュ ラ 紀	丹波帶の 堆積岩コンプレックス	斑れい岩類	塩基性深成岩類の貫入 丹波帶の付加体の形成
201.4				

資料：「奈良地域の地質」平成 12 年 地質調査所 5 万分の 1 地質図幅説明書より一部加筆

天理山古墳群はこの田辺丘陵上に位置しており、大住車塚古墳も同丘陵北端の緩傾斜地に立地している。また、東方の井手町地域の丹波帯の延長とみなされる丹波帯が散点的に分布しており、田辺丘陵の沖積地との境界付近及び飯岡丘陵の全域で丹波帯堆積岩コンプレックスの主体をなす泥岩が分布する。飯岡車塚古墳はこの独立丘陵である飯岡丘陵上に立地している。

(4) 植生及び鳥類

史跡綴喜古墳群の植生調査及び鳥類調査

今回、史跡綴喜古墳群の整備・活用に向け史跡指定地内の樹木管理に向けた基盤情報を収集・整備するため、京都府立大学に委託し、『令和5年度受託研究 史跡綴喜古墳群の整備・活用に向けた樹木管理のためのレーザ測量技術を用いた基盤情報整備』として植生調査及び鳥類調査、その他レーザ測量等の調査を実施した。各古墳の植生調査及びレーザ測量を森林計画学研究室の長島啓子教授が、天理山古墳群の鳥類調査をランドスケープ学研究室の福井亘教授がそれぞれ中心となり実施した。

植生に関する調査は、小型無人航空機(UAV=ドローン)搭載型及び地上可搬型によるレーザ測量等により植生とその構造を把握した。また、特に広い面積を有する天理山古墳群では、今後の整備方針を検討するため、食物連鎖の上位種である鳥類の分布状況を把握する鳥類調査を実施し、史跡を管理する上で不可欠な大径木の分布状況を把握した。

以下は、同調査の報告書をもとに著述したものである。

大住車塚古墳の植生

大住車塚古墳の植生は、アベマキ及びツブラジイが優占する樹林である。高木層にはこれらのアベマキやツブラジイに加え、アラカシやコナラも見られる。高木層の立木の多くは胸高直径30cm以上を超える大径木である。また、低木層には高木層で見られた樹種以外に、シャシャンボ、カナメモチ、クロガネモチ、ヤマザクラ、ヤマハゼ等、多様な樹種が見られる。一方、草本層の植被率は低く、ほとんど植生が見られない状況である。



図16 大住車塚古墳 後方部の現況



図17 大住車塚古墳 前方部の現況



図15 調査風景

調査の結果、全体がアベマキ・ツブラジイ林の単一の林相と判断された。(図 18 大住車塚古墳林相区分図 参照)

面積は 0.348 ha である。

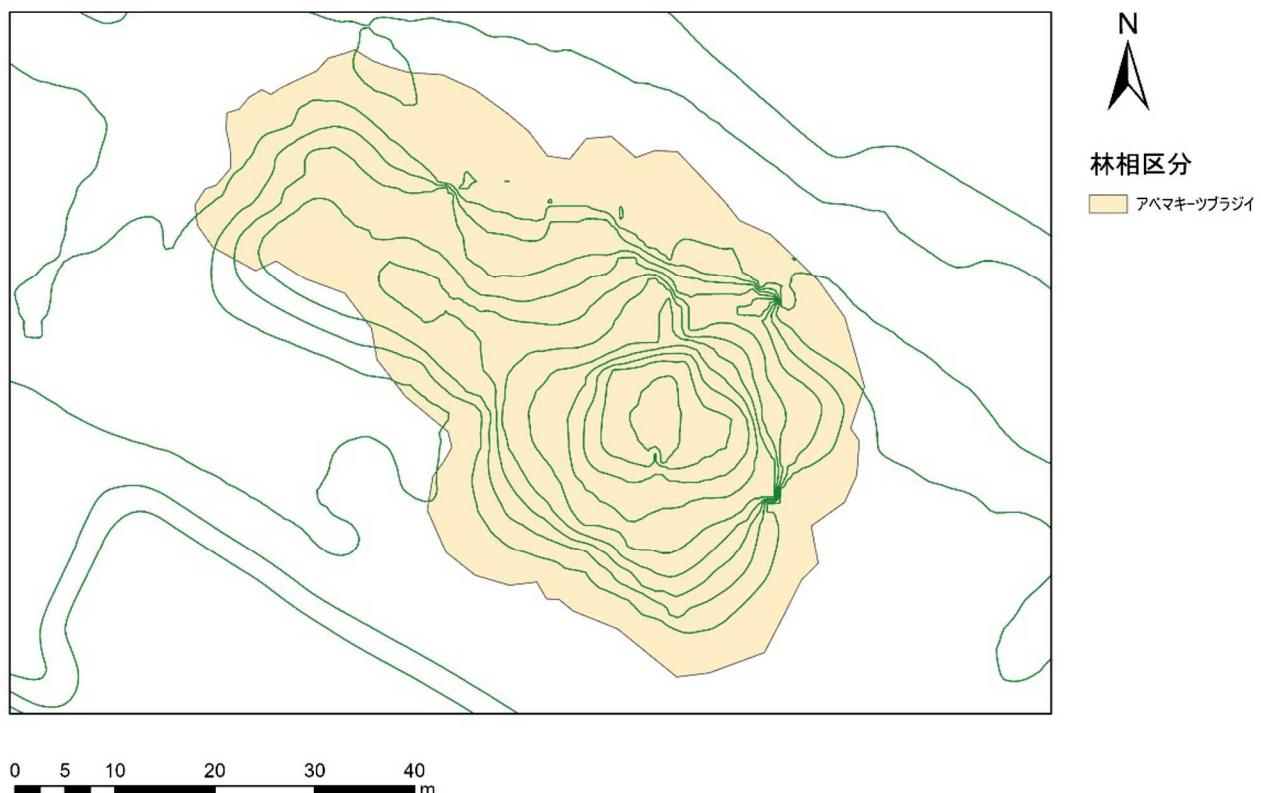


図 18 大住車塚古墳林相区分図

天理山古墳群の植生

天理山古墳群周辺の森林の形態は、ツブラジイ林が 2.514 ha と最も多く、約 4 割を占め、天理山古墳群の北側に分布している。竹林は 1.683 ha とツブラジイ林に次いで多く、1 号墳・3 号墳から北側に分



図 19 ツブラジイ林



図 20 タケ林



図 21 ヒノキ・タケ混合林



図 22 ヒノキ・ツブラジイ・タケ混合林

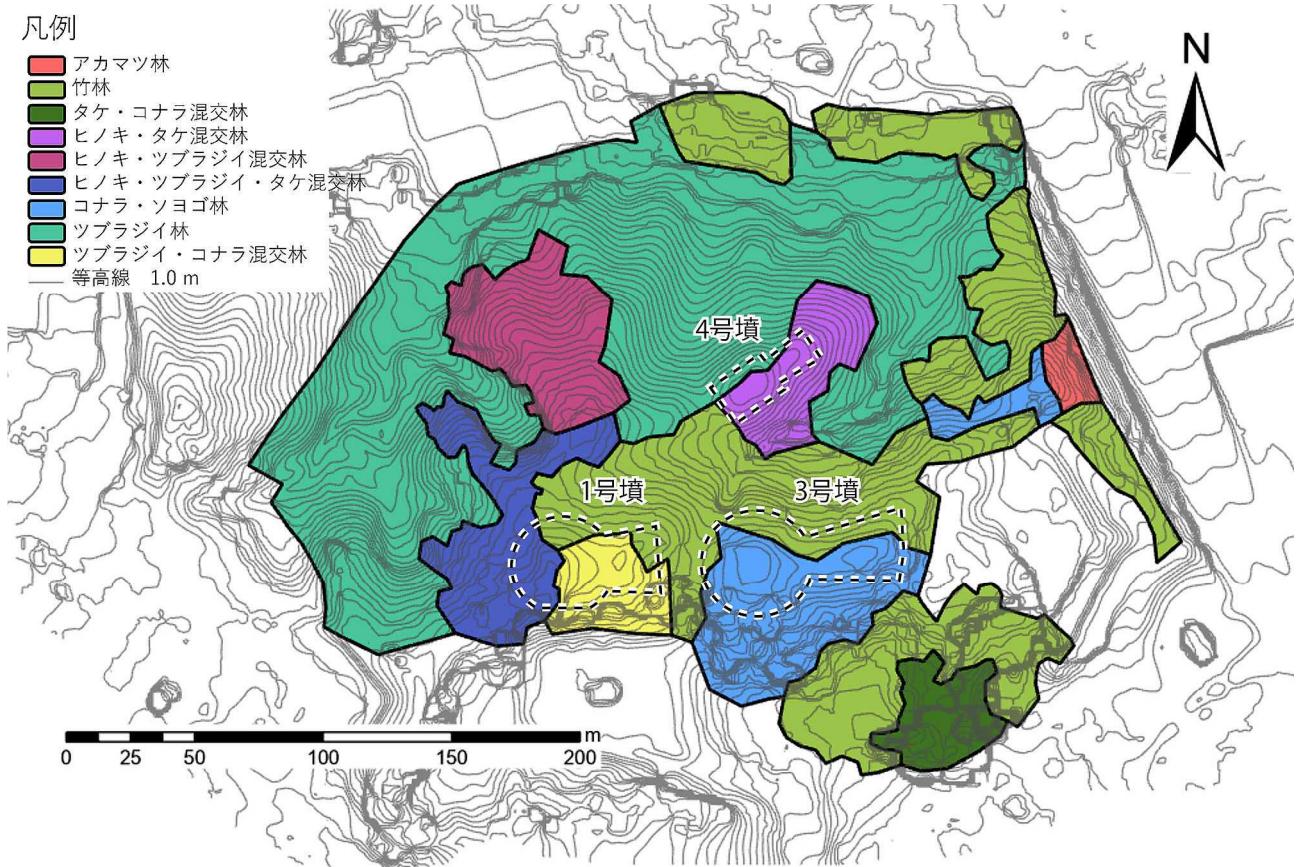


図 23 天理山古墳群林相区分図

布している。また、タケの混交している場所が竹林の周辺に合計 0.681 ha 見られる。ヒノキは 4 号墳周辺を中心に、ツブラジイやタケと混交林を形成しており、その面積は合計 0.860 ha である。また、東側にわずかであるがアカマツ林が分布している。(図 23 天理山古墳群林相区分図 参照)

調査区域の地形については、測量結果による地形解析(TPI=地形位置指数)の結果、尾根が 1.3 ha、谷が 0.97 ha、斜面が 3.56 ha に区分される。(図 24 天理山古墳群 TPI 算出結果 参照)

林相区分図と TPI の図を重ね、植生別に TPI による地形区分を見ると、アカマツ林は主に尾根部に

凡例

 谷
 斜面部
 尾根
 等高線 1.0 m

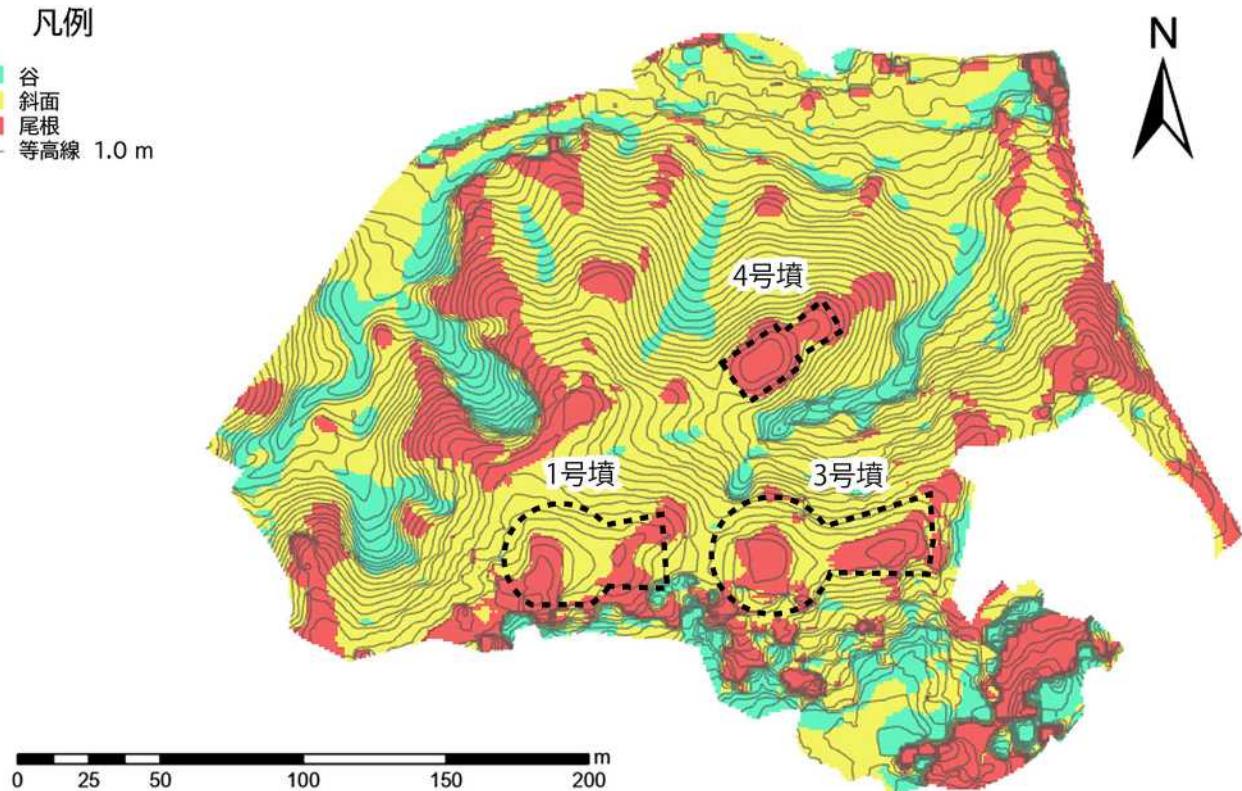


図 24 天理山古墳群 TPI 算出結果

分布しており、タケ・コナラ混交林は尾根部に多く分布し、谷部にも分布が見られる。竹林及びツブラジイ林は主に斜面部に分布している。その他の林相は尾根部と斜面部に多く分布している。(図 25 天理山古墳群の各植生による TPI 地形区分の割合 参照)

このように、林相区分図の植生と地形との関係から、天理山古墳群周辺の植生は、ツブラジイ林は北側の谷から斜面にかけて、ヒノキは 4 号墳のある尾根を中心に、コナラ林は南側の斜面、竹林が 1 号墳、3 号墳の北側の緩やかな斜面に分布している。また、竹林は北側の斜面に拡大するとともに、ヒノキ林、コナラ林、ツブラジイ林と混交林を形成するようになっていると考えられる。ツブラジイ林は大径木が多く、一休寺の社寺林や借景として長い間維持されてきたと考えられる。

一方、1 号墳、3 号墳の南側では人の手による伐採が行われたことで、比較的明るい樹林が形成され、

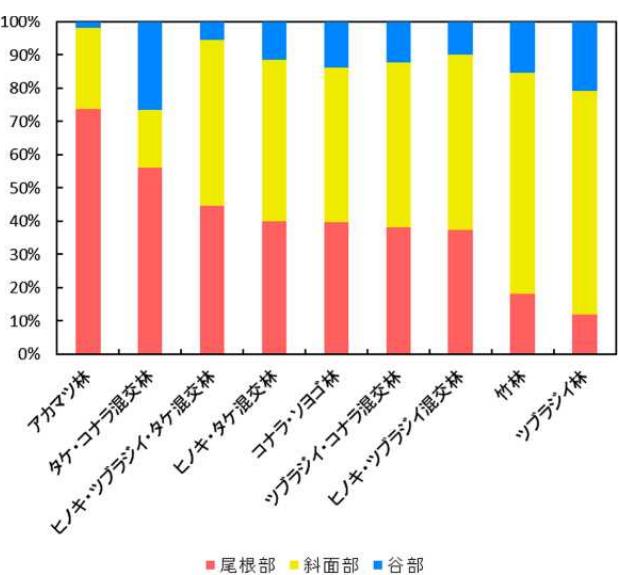


図 25 天理山古墳群の各植生による TPI 地形区分の割合

階層構造が発達した樹林が斜面上部に見られるものの、斜面下部ではタケが侵入した混交林を形成している。アカマツ林が東側の尾根の一部に残存し、その周辺や南側斜面にコナラ・ソヨゴ林が見られるところから、かつてはアカマツ林であった場所が、人が山林を活用しなくなったことやマツ枯れによりコナラ林に変化した林分となったが(森下他, 2002)、その後ナラ枯れなどの影響もありソヨゴが増えた低質林へと移行している状況であると考えられる(中家他,2014)。

天理山古墳群の鳥類

今回の調査は、天理山古墳群指定地内に8箇所の調査地点を設定し、1地点10分間、調査観察半径約25mの半円球内に出現する鳥種名及び個体数、確認場所を記録するポイントセンサス法を採った。

この調査において確認された鳥類は、3目13科18種である。このうち、どの調査地点でも確認できたのがヒヨドリである。ヒヨドリは通年を通じて多く確認できるが、近年では特に越冬期に非常に多く確認することができる都市型鳥類である。採餌は昆虫類や花の蜜などであることを考えると、周辺域にツバキなどの花木が見られたため多くのヒヨドリが確認された可能性がある。また、メジロも全ての調査地点ではないものの定期的に確認された。このことは、調査地点が住宅地に近接した場であり、周辺住宅地の植栽がある程度疎林に近い状況であり、メジロが飛来しやすい環境であることが示された。メジロがヒヨドリと同様の採餌で花の蜜を好む鳥類であることから、周辺住宅地に植栽されているツバキ系の花木から飛来したのではないかと推察される。ウグイスは、ネザサや見通しの良い藪化した場で確認された。藪化しているとはいって、ある程度の疎林的な箇所での確認であったことから、適度な空隙のある個所の方が好まれている可能性が考えられる。アオジについても、ウグイスと同じ状況での確認であり、同様の生息環境を好む種であることから、空間の有り方が重要と言えよう。今回は越冬期での調査であることから、冬鳥のシロハラやツグミ、ジョウビタキが確認されている。これらの鳥類が飛来しやすい環境は、マダケの多い環境以外であると考えられる。マダケの多い場所においては、鳥類がほぼ確認できていない。当該地点が単一植生であることと、食餌出来るものが極端に少ないと考えられる。ハシブトガラスは、天理山古墳群の上部を同一方向に飛来している個体が多く確認できた。恐らく近隣に塘(ねぐら)地があり、朝の採餌に移動する個体が天理山古墳群上空を飛来していると思われる。また、樹上で休息している個体も見られたことから、指定地内を中継地にしている可能性も考えられる。

天理山古墳群のある里山形態の緑地は、関西圏における普遍的な里山の状況と同一であり、生態的にも鳥類の生息、休息できる場になっていると考えられる。



図26 アオジ



図27 マダケ

鳥種自体も都市部に多く見られる種であり、特段珍しいわけではないが発掘調査等のために人為的に伐採した箇所(1号墳や3号墳)では、疎林化しており、鳥類にとっては飛来しやすい環境となっていると思われる。かつての日本の里山の植生状況と同じような環境が構成されると、食物連鎖の上位種である鳥種の種数や個体数が多く確認できるようになり、生物多様性も高まるものと言えよう。



図 28 疎林的空間

飯岡車塚古墳の植生

飯岡車塚古墳の植生は、現地の林外からの観察及び UAV レーザによる取得画像から、タケを中心にアカメガシワやクヌギ等が混交した樹林であることが確認された。よって本調査地の林相は、タケ・アカメガシワ・クヌギ混交林の单一林相である。(図 29 飯岡車塚古墳林相区分図 参照)

面積は 0.173 ha である。

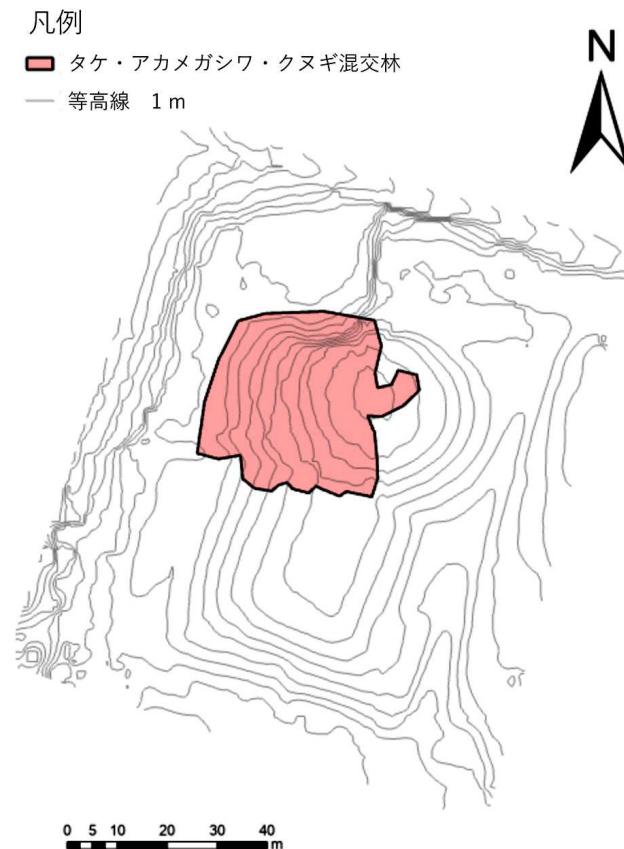


図 29 飯岡車塚古墳林相区分図

第3節 歴史的環境

(1) 京田辺市の歴史

本市は京都府の南西部に位置し、東側に木津川の沖積平野が広がり、西側には生駒山系から延びる丘陵地が連なる。市内で確認された遺跡はこの沖積地から丘陵地にかけて広く分布しており、地域の豊かな歴史を物語っている。

旧石器時代の遺跡としては市南部の山間部地域に所在する高ヶ峯遺跡が知られており、サヌカイト製石核1点が出土している。縄文時代の遺跡としては、縄文時代中期末(約4400年前)の薪遺跡が集落遺跡として知られており、隅丸方形の竪穴建物や土壙群などが発見されている。また、市南部では三山木遺跡から縄文時代晚期(約3200~2400年前)の土器類が出土しているほか、三山木遺跡の南西に位置する山崎遺跡からは、明確な遺構は検出されていないが、石棒や異形石製品が出土している。

弥生時代になると、縄文時代に比べて遺跡数が増加する。市中部からやや北寄りに位置する稻葉遺跡では、一辺約11.5mの規模を有する方形周溝墓が検出されている。周溝から出土した土器から、時期は前期後半(紀元前3~2世紀)のものとされる。他にも、宮ノ口遺跡、宮ノ下遺跡、三山木遺跡などで前期の遺構、遺物が確認されている。弥生時代中期(紀元前2~1世紀)では、^{みなみがいと}南垣内遺跡から一辺16×14mの方形周溝墓が、市南部では南山遺跡から竪穴住居が16棟確認されている。後期(紀元前1~紀元後3世紀)になると飯岡遺跡や、^{いのおか}銅鉢や鉄製品が出土した田辺天神山遺跡など、丘陵部で多く遺跡が見つかっている。

古墳時代になると、木津川流域では前期前半(3世紀末から4世紀前半)に椿井大塚山古墳、^{つばい い おおつか}平尾城山古墳(ともに木津川市)が築造されるが、その後に続く首長墓はみられない。前期後半(4世紀後半)以降、本市から八幡市にかけて前方後円墳や前方後方墳などが南北に細長く散在しながら分布し、古墳造営が活発化する。このうち首長墓とされるのは、本市では大住の大住南塚古墳(前方後方墳、墳丘長71m)、同大住車塚古墳(前方後方墳、墳丘長66m)、興戸に所在する興戸1号墳(前方後円墳、墳丘長24m)、同2号墳(円墳、直径28m)、飯岡に所在する飯岡車塚古墳(前方後円墳、墳丘長87m)である。京田辺市内に活発に古墳が造られるのと同時に、八幡市内では石不動古墳(前方後円墳、墳丘長88m)、茶臼山古墳(前方後方墳、墳丘長50m)、八幡西車塚古墳(前方後円墳、墳丘長114m)、八幡東車塚古墳(前方後円墳、墳丘長推定90m)、ヒル塚古墳(方墳、一辺52m)がそれぞれ築造される。これらの中でも大住南塚古墳、飯岡車塚古墳、茶臼山古墳、八幡西車塚古墳の埋葬施設には竪穴式石室が採用されるなど、古墳時代前期後半に木津川の水運に關係する首長の活発な造墓活動が行われる。古墳時代中期(4世紀末~5世紀)以降は飯岡車塚古墳が位置する飯岡丘陵で、ゴロゴロ山古墳(円墳、直径60m)、薬師山古墳(円墳、直径38m)、トヅカ古墳(円墳、直径25m)が築造され、飯岡丘陵が前期から継続して古墳が造られた地域であることが窺える。

また天理山古墳群が所在する薪地区には、^{おがき}小欠古墳群や堀切古墳群をはじめとする多くの後期古墳群が所在する。小欠古墳群は天理山古墳群の南側に位置していた古墳群であり、3基の古墳から構成される。中でも小欠1号墳は横穴式石室を持つ古墳で、副葬品として土師器の壺、須恵器の蓋付杯、高杯が出土している。また天理山古墳群の西側には10基の円墳と10基の横穴墓で構成される堀切古墳群が所在する。堀切7号墳は直径15mの円墳でありながら、東海系の埴輪を樹立しており、地域間交流が活発であったことが窺える。他にも、薪地区では平地においても埋没古墳である薪狭道1号墳や薪高木1

～3号墳など、古墳時代中期から後期(6～7世紀)にかけて古墳が造られ、丘陵だけでなく平地にも活発に古墳が造られていた様子が窺える。

市域は、古代の律令制下では山背(城)国綴喜郡に属する。飛鳥・奈良時代の遺跡としては、興戸遺跡が挙げられる。興戸遺跡は東西0.7km、南北1kmの範囲に広がり、掘立柱建物群や土地区画に関連した遺構が見つかっている。また古代寺院としては興戸遺跡と重複する興戸廃寺や、市南部の三山木廃寺、普賢寺廃寺が、生産遺跡としては東北部に交野ヶ原窯跡群(奈良時代)や松井窯跡群(奈良～平安時代)の須恵器窯が知られている。南部には、飛鳥時代末の須恵器窯である新谷窯跡や、奈良時代前期のマムシ谷窯跡が検出されている。平安時代末には、市域に興福寺(大住庄)や石清水八幡宮(薪庄)などの荘園が成立した。

中世には、本市を含めた南山城地域には数多くの城館が存在した。都に近いこの地は、応仁・文明の乱などの戦乱にたびたび巻き込まれた。その後、国人たちが守護を排除し自ら自治を獲得した「山城国一揆」が起こっている。本市には国一揆の時代に活躍した国人たちの拠点である城館跡が残っている。そのような城館跡としては、15世紀から16世紀にかけての堀切や石組遺構が検出されている田辺城、堀切や堅堀などの防御施設を伴う山城である天王畠城、文献史料にもたびたび登場する草路城、戦国時代末の城館が近世期に改築されたと伝わる南山城などが挙げられる。

また、薪遺跡で在地領主の居館跡や園池の遺構を検出し、遺物は13世紀後半～14世紀前半を中心とし、中には白磁四耳壺、青磁盤などの優品も見られる。

近世以前よりこの地は複数領主により支配されていた。近世以降は淀藩領・幕府領・公家領・旗本領・寺社領などが入り乱れ、現在の京田辺市域に存在した近世村のうち半数以上の村が複数の領主によって支配される相給村落であった。また、江戸時代は神仏習合も根強く、市域の神社には神宮寺を有するものも少なくなかった。月読神社境内に置かれた六坊からなる福養寺や佐芽神社に置かれた恵日寺など規模の大きいものもあったが、明治維新後に廃絶された。恵日寺の木造千手観音立像(重要文化財)が寿宝寺に、福養寺の木造薬師如来立像(市指定文化財)が両讚寺に移されるなど、廃寺となった神宮寺の仏像などは近隣の寺院に移された。この時期の京田辺市域は京近郊の農村地帯として発展し、木津川の水運を使って淀や京に年貢や物資が運ばれた。

明治維新後、国家が近代化を進める中で京田辺市域も大きな変化を遂げる。20を超える近世村は次第に統合され、明治22(1889)年のいわゆる明治の大合併を経て、大庄村、田辺村、草内村、三山木村、普賢寺村の5村体制となった。このうち田辺村は、明治39(1906)年に町制を施行し田辺町となる。明治12(1879)年に綴喜郡役所が田辺村に設置され、大正15(1926)年に郡役所そのものが廃止されるまで、田辺村(田辺町)で継続して執務が行われた。

明治31(1898)年には、四条畷～新木津間において鉄道が開通し、市域ではじめての鉄道駅となる関西鉄道田辺駅(現JR京田辺駅)が設置された。同線は、近隣有力者によって設立された城河鉄道によって敷設が計画されたが、城河鉄道は三重県に本社を置く関西鉄道に買収されたため、関西鉄道の路線として開通することになった。関西鉄道は明治40(1907)年に鉄道国有法により国有化され、敷設された路線は国有鉄道の経営を経て現在のJR学研都市線となり、沿線住民の生活を支えている。また、昭和3(1928)年には奈良電鉄によって西大寺～京都駅南口間が開通し、このとき京田辺市域には新田辺駅と三山木駅が設置された。奈良電鉄は昭和38(1963)年に近畿日本鉄道との合併により消滅し、同線は近畿日本鉄道として現在も運行されている。

昭和 26(1951)年に、大庄村、田辺町、草内村、三山木村、普賢寺村は合併し、現在とほぼ同様の町域を持つ田辺町が誕生した。昭和 27(1952)年には国鉄大住駅(現 JR 大住駅)と国鉄上田辺駅(現 JR 三山木駅)が、昭和 29(1954)年には奈良電鉄興戸駅(現近鉄興戸駅)がそれぞれ開業し、鉄道駅の整備が進む。昭和 38(1963)年には市域で初めての高等学校として京都府立田辺高等学校が開校した。昭和 39(1964)年には山城大橋が架橋され、山城大橋を通過する府県道枚方彦根線は昭和 45(1970)年に国道に昇格した。昭和 49(1974)年には大住車塚古墳が市域ではじめての国史跡の指定を受け、翌昭和 50(1975)年に田辺町指定文化財第 1 号として大住隼人舞^{はやとまい}を指定した。昭和 61(1986)年には同志社大学・同志社女子大学の京田辺キャンパスが開校し、国鉄(現 JR)同志社前駅が開業した。

鉄道網・道路網の整備や北部地域での大規模な住宅開発などを背景として、田辺町の人口は増加を続ける。合併直前の昭和 25(1950)年に 15,391 人だった人口は平成 6(1994)年 4 月には住民登録人口で 5 万人を超え、平成 9(1997)年には市制が施行され京田辺市が誕生し、現在に至る。

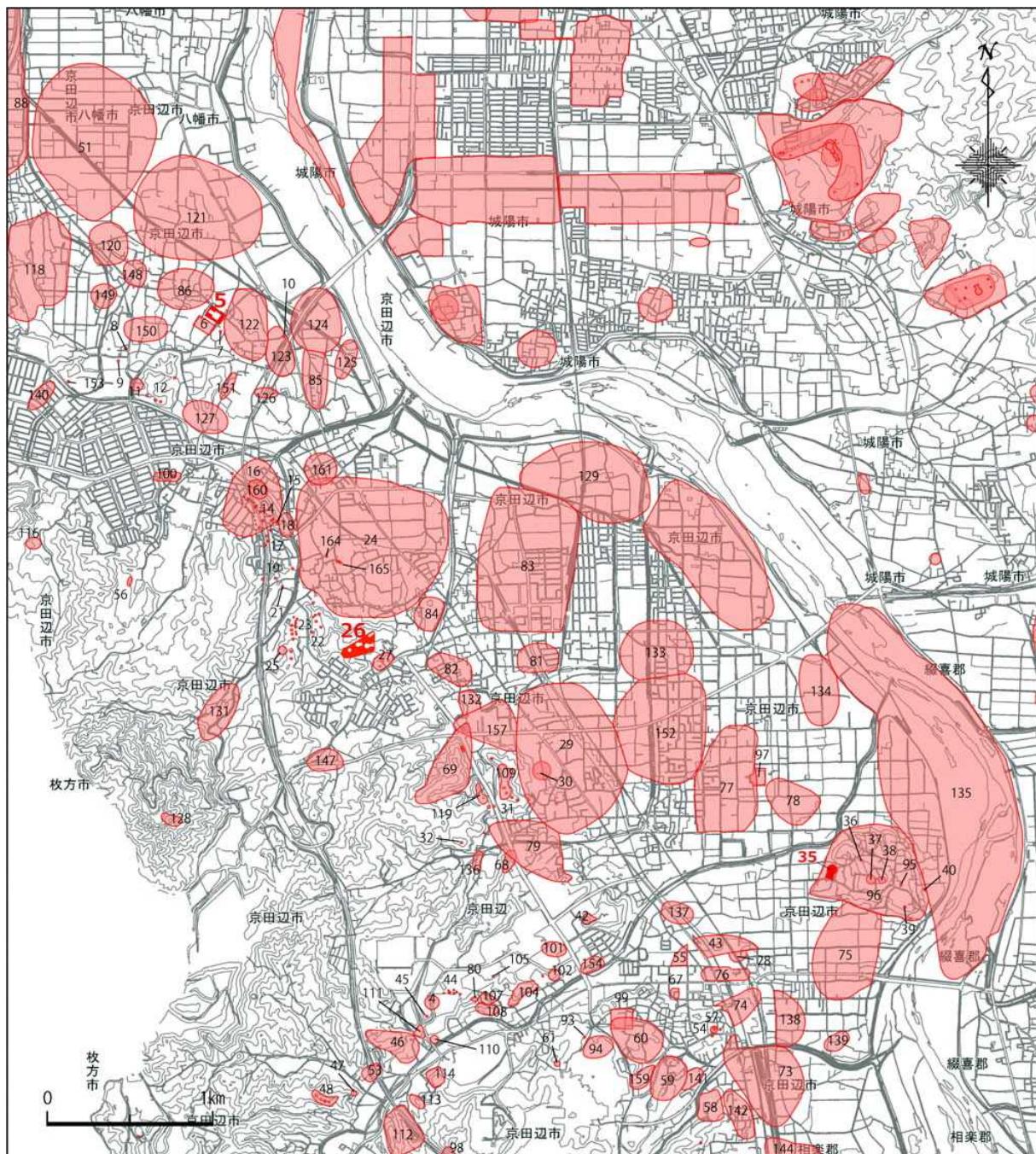
市内には、遺跡だけでなく数多くの貴重な有形文化財も残されている。^{おおみどうかんのんじ} 大御堂觀音寺所蔵の国宝・木心乾漆十一面觀音立像^{もくじんかんじつじゅうまいがんのんりゅうぞう} や寿宝寺所蔵の重要文化財・木造千手觀音立像^{じゅうじょうぶつ} といった彫刻をはじめ、一休寺として有名な酬恩庵の本堂・方丈・玄関・庫裏・東司・浴室・鐘樓、佐牙神社の本殿、白山神社の本殿、澤井家住宅などの建造物が国の重要文化財の指定を受けている。また酬恩庵の庭園は国の名勝に指定されている。現在本市には国、京都府及び京田辺市が指定・登録する文化財は 74 件(令和 6 年 11 月現在)である。

(2) 史跡綴喜古墳群が所在する地域の歴史

大住車塚古墳の所在する大住は、古代、大隅国^{おおすみのくに} から来住した隼人^{はやと}の一部が開発したと伝えられる。平安時代には大住庄と呼ばれ、奈良興福寺の荘園であった。中世においては、石清水八幡宮の荘園であった薪庄との紛争が有名であり、嘉禎元(1235)年からその翌年にかけて生じた紛争では幕府・朝廷を巻き込み、藤原定家の『明月記』にも記述がみられる。また、興福寺領大住庄との関係は不明であるが、隼人司領大住庄が存在していたことが『康富記』に記されている。近世以降は大庄村として、曇華院、醍醐寺^{どんげいん}、三宝院、淀藩、旗本天野氏の四領主を持つ相給村落となつた。曇華院領の代官を勤めた澤井家の居宅は現存しており、澤井家住宅(寛保元(1741)年建築)として重要文化財に指定されている。明治維新後、大庄村は明治 22(1889)年に松井村と合併し、松井・大住両地区にまたがる大庄村となつた。

天理山古墳群が所在する薪^きは、古代には^{かんなびやま} 甘南備山^{かんなび} 山頂付近に神奈備神社が造られ、その東側の谷には『今昔物語集』の説話にもみられる^{かんなびじ} 神奈比寺^{かんなびじ}(甘南備寺)が立地していた。同寺は元禄 2(1689)年に薪山^{やま} 境外に移され、説話に登場する薬師如来坐像(市指定文化財)を本尊とし、今なお信仰され続けている。天理山古墳群の立地する丘陵の東裾には、延喜式内社とされる棚倉孫神社^{たなくらひこ} が鎮座するなど、天理山古墳群周辺が祭祀や信仰に対して重要な地域であることが窺える。平安時代には石清水八幡宮に薪を納める薪庄(薪園)となり、後に大住庄と激しい争いがあった。室町時代には、^{なんぽじょうみょう} 南浦紹明^{だいおうこくし}(大応国師)が当地に妙勝寺^{みょうしょうじ}を建立したが、元弘の乱の戦火により荒廃した。その跡に一休宗純^{いっきむらひくじゅん} が酬恩庵を営んだ。石清水八幡宮領だった薪村は、近世には朝廷領となり、幕府領と朝廷領の相給などへの変遷があつたが、酬恩庵領 95 石は変動がなかつた。明治 22(1889)年に薪村、田辺村、興戸村、河原村が合併し田辺村となつた。

飯岡車塚古墳が所在する飯岡は、古代には山本郷に属していたといわれる。万葉集には飯岡（くいおか）を詠んだ歌が残されており、前述の『今昔物語集』の説話では甘南備山について「今ハ昔、山城ノ国、綴喜ノ郡ニ飯ノ岳ト云フ所有リ。其ノ戌亥ノ方ノ山」と表現され、「飯ノ岳」は飯岡を指すと考えられる。中世には飯岡庄となり、観音寺という大寺があったとされ、永享元(1429)年に後小松上皇から同寺に祈禱を命じる院置が下されている（『建内記』）。同寺は江戸時代の地誌などにもみえないため、早くに廃絶した、または明治期まで存在した蓮華寺の前身となったなどの説があるが詳細は不明である。なお、廃された理由は不明であるが、蓮華寺も明治 8(1875)年に廃寺となった。近世期に入ると飯岡村は淀藩領となった。近世末期には当地の豪農豊田武兵衛が私財を投げ打って用水樋の築造をはじめ、戦前に建てられた顕彰碑が現在も残っている。その後、明治 22(1889)年に飯岡村、草内村、東村が合併し草内村となった。



4.下司館跡 5.大住塚古墳 6.大住南塚古墳 7.姫塚古墳 8.月読神社古墳 9.内山古墳 10.立居地藏古墳 11.城山遺跡 12.城山1~4号古墳
14.郷土塚1~6号墳 15.大穴1号墳 16.狼谷遺跡 17.畠山1~4号墳 18.畠山遺跡 19.西山1~3号墳 21.牛ノ宮古墳 22.堀切1~10号墳 23.堀
切1~10号横穴 24.薪遺跡 25.西薪遺跡 26.天理山古墳群 27.小穴古墳群 28.東角田遺跡 29.興戸遺跡 30.興戸廐寺跡 31.興戸1~9号墳
32.酒壺古墳 33.飯岡塚古墳 34.弥陀山古墳 37.口口山古墳 38.薬師山古墳 39.金泥山古墳 40.十塚古墳 42.田辺天神山遺跡 43.田中
東遺跡 44.下司1~8号墳 45.大御堂裏山古墳 46.普賢寺跡 47.御所内遺跡 48.王居谷古墳群 51.魚田遺跡 53.大西館跡 54.山崎1~3号 55.田中
西遺跡 56.貴谷遺跡 57.山崎遺跡 58.三山木寺跡 59.西羅遺跡 60.南山遺跡 61.多々羅遺跡 67.上谷浦遺跡 68.興戸城跡 69.田辺城跡 73.
宮ノ下遺跡 74.三山木遺跡 75.古屋敷遺跡 76.二又遺跡 77.南垣内遺跡 78.宮ノ後遺跡 79.興戸宮ノ前遺跡 80.新宮前遺跡 81.河原遺跡
82.尼ヶ池遺跡 83.稻葉遺跡 84.棚倉孫神社遺跡 85.三野遺跡 86.東林遺跡 88.新田遺跡 93.口駒ヶ谷古墳 94.口駒ヶ谷遺跡 95.飯岡東原古
墳 96.飯岡遺跡 97.草路城跡 98.西平川原遺跡 99.南山城跡 100.貴谷古墳群 101.都谷北遺跡 102.都谷遺跡 104.新宗谷館跡 107.新宮前
遺跡 108.新宮社東遺跡 109.興戸丘陵東遺跡 110.観音寺東遺跡 111.観音寺東館跡 112.小田垣外遺跡 113.小田垣外北遺跡 114.打垣外遺跡
116.虚空藏谷遺跡 118.向谷遺跡 119.興戸丘陵西遺跡 120.西村遺跡 122.岡村遺跡 123.久保田遺跡 124.三木本遺跡 125.志保遺跡 126.野上
遺跡 127.地内山遺跡 128.神奈備寺跡 129.伝云林遺跡 131.城ヶ前遺跡 132.竹ノ脇遺跡 133.鍾田遺跡 134.橋折遺跡 135.大將軍遺跡
136.川原谷遺跡 137.野神遺跡 138.直田遺跡 139.速藤遺跡 140.上西野遺跡 141.芝山遺跡 142.佐田垣内遺跡 144.桑町遺跡 147.茂ヶ谷遺跡
148.八河原遺跡 149.西野遺跡 150.杉谷遺跡 151.塔ノ脇遺跡 152.大切遺跡 153.上西野古墳 154.七瀬川遺跡 157.田辺遺跡 159.木原城館
跡 160.小林遺跡 161.薪城跡 164.薪狭道1号墳 165.薪高木1~3号墳

図 30 史跡綴喜古墳群周辺の遺跡地図(京都府自治体情報化推進協議会「遺跡マップ」より抜粋一部加筆)



図 31 国宝・十一面觀音立像
(大御堂觀音寺所蔵)



図 32 国指定名勝・酬恩庵庭園

表 4 市内指定文化財一覧 (令和6年11月時点)

	指定別	分類	種別	名称	所有者等	所在地	時代	指定年月日
1	国	国宝	美術工芸品	彫 刻 木心乾漆十一面觀音立像	觀音寺	普賢寺	奈 良	(明治42年4月5日) 昭和28年3月31日
2		重文	建造物	寺 院 酬恩庵本堂	酬恩庵	薪	室 町	明治44年4月17日
3		重文	建造物	寺 院 酬恩庵方丈及び玄関・庫裏・東司・浴室・鐘樓	酬恩庵	薪	江 戸	昭和46年6月22日
4		重文	建造物	神 社 佐牙神社本殿	佐牙神社	江津	桃 山	大正12年3月28日
5		重文	建造物	神 社 白山神社本殿	白山神社	宮ノ口	室 町	大正12年3月28日
6		重文	建造物	民 家 澤井家住宅	澤井家	岡村	江 戸	昭和50年6月23日
7		重文	建造物	その他の 法泉寺十三重塔	法泉寺	草内	鎌 倉	大正5年5月24日
8		重文	美術工芸品	絵 画 一休和尚画像	酬恩庵	薪	室 町	明治40年5月27日
9		重文	美術工芸品	彫 刻 木造一休和尚坐像	酬恩庵	薪	室 町	大正2年4月14日
10		重文	美術工芸品	彫 刻 木造千手觀音立像	寿宝寺	山本	平 安	大正2年4月14日
11		重文	美術工芸品	古文書 後花園天皇宸翰女房奉書	酬恩庵	薪	室 町	昭和52年6月11日
12		重美	建造物	その他の 極楽寺九重石塔	極楽寺	天王	室 町	昭和8年12月14日
13		重美	建造物	その他の 白山神社石灯籠	白山神社	宮ノ口	室 町	昭和13年10月10日
14		史跡	史 跡 古 墳	綾喜古墳群(大住車塚古墳・天理山古墳群・飯岡車塚古墳)	京田辺市ほか	大住、薪、飯岡	古 墳	(昭和49年6月11日) 令和4年11月10日
15		名勝	名 勝 庭 園	酬恩庵庭園	酬恩庵	薪	室町・江戸初	昭和26年6月9日
16	府指定	建造物	寺 院 酬恩庵虎丘庵・總門・中門	酬恩庵	薪	江 戸	昭和63年4月15日	
17		美術工芸品	彫 刻 木造牛頭天王立像	朱智神社	天王	平 安	昭和61年4月15日	
18		美術工芸品	彫 刻 木造十一面觀音立像	法雲寺	宮ノ口	平 安	平成元年4月14日	
19		美術工芸品	古文書 一休宗純関係資料	酬恩庵	薪	室 町	平成13年3月23日	
20		美術工芸品	考古資料 家形石棺(堀切6号横穴出土)	京田辺市	田辺	古墳後期	平成5年4月9日	
21		美術工芸品	絵 画 紹本著色大応国師像	酬恩庵	薪	室 町	平成30年3月23日	
22		府指定	美術工芸品	絵 画 紹本著色一休宗純像	酬恩庵	薪	室 町	平成30年3月23日
23		府指定	美術工芸品	絵 画 紹本著色一休宗純像(朱太刀像)	酬恩庵	薪	室 町	平成30年3月23日
24		府指定	美術工芸品	絵 画 酬恩庵方丈障壁画 狩野探幽筆 43面 附 紙本墨画太湖石圖 原在中筆 2面 紙本金地著色梅松圖 2面	酬恩庵	薪	江 戸	令和6年3月29日
25		府指定	史 跡	集落跡 田辺天神山遺跡	同志社	三山木	弥 生	平成18年3月17日
26	府指定	史 跡	古 墳	下司古墳群・大御堂裏山古墳	同志社	普賢寺	古 墳	平成31年3月29日

	指定別	分類	種別	名称	所有者等	所在地	時代	指定年月日
27	府指定	無形民俗		宇治茶手もみ製茶技術	京都府宇治茶製法手もみ技術保存会連絡会議			平成20年3月21日
28	府登録	建造物	神社	天神社本殿	天神社	松井	江戸	昭和58年4月15日
29	府登録	建造物	神社	棚倉孫神社本殿	棚倉孫神社	田辺	桃山	昭和58年4月15日
30	府登録	建造物	神社	昨岡神社本殿	昨岡神社	草内	江戸	昭和58年4月15日
31	府登録	建造物	神社	朱智神社本殿	朱智神社	天王	江戸	昭和58年4月15日
32	府登録	建造物	神社	須賀神社本殿	須賀神社	打田	江戸	昭和59年4月14日
33	府登録	美術工芸品	彫刻	木造大応国師坐像	酬恩庵	薪	室町	昭和60年5月15日
34	府登録	美術工芸品	古文書	大徳寺文書	大徳寺	束	室町～昭和	昭和62年4月15日
35	府暫定登録	美術工芸品	彫刻	木造地蔵菩薩立像	大徳寺	束	桃山	令和6年3月29日
36	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色枳迦十六善神像	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
37	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色仏涅槃図	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
38	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色仏涅槃図	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
39	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色松源崇獄像 応仁三年一休宗純の賛がある	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
40	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色宗峰妙超像 一休宗純の賛がある	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
41	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色宗峰妙超像 寛正二年一休宗純の賛がある	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
42	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色徹翁義亨像 一休宗純の賛がある	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
43	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色言外宗忠像 一休宗純の賛がある	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
44	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色華叟宗墨像 自賛がある	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
45	府暫定登録	美術工芸品	絵画	絹本着色沒倫紹等像	酬恩庵	薪	室町	平成29年9月25日
46	府暫定登録	史跡	旧境内	酬恩庵（一休寺）境内	酬恩庵	薪		平成29年12月27日
47	府暫定登録	史跡	旧境内	朱智神社境内	朱智神社	天王		平成31年2月1日
48	府暫定登録	美術工芸品	考古資料	銅鏡（畠山3号墳出土）	京田辺市	田辺	古墳	平成30年3月23日
49	府暫定登録	美術工芸品	考古資料	鍛冶具（郷土塚4号墳出土）	京田辺市	田辺	古墳	平成30年3月23日
50	市指定	建造物	神社	天神社本殿	天神社	高木	江戸	令和5年3月1日
51	市指定	美術工芸品	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	極楽寺	天王	鎌倉	平成12年4月1日
52	市指定	美術工芸品	彫刻	木造大日如来坐像	大徳寺	束	鎌倉	平成12年4月1日
53	市指定	美術工芸品	彫刻	木造阿弥陀如来坐像	教念寺	草内	平安	平成21年6月1日
54	市指定	美術工芸品	彫刻	木造阿弥陀如来及び両脇侍像	寿命寺	興戸	平安	平成21年6月1日
55	市指定	美術工芸品	彫刻	木造阿弥陀如来立像	光照寺	南山西	平安	平成22年5月1日
56	市指定	美術工芸品	彫刻	木造十一面觀音立像	法泉寺	草内	平安	平成22年5月1日
57	市指定	美術工芸品	彫刻	木造薬師如来立像	両讚寺	西八	平安	平成23年5月1日
58	市指定	美術工芸品	彫刻	木造降三世明王・金剛夜叉明王立像	寿宝寺	山本	平安	平成23年5月1日
59	市指定	美術工芸品	彫刻	木造不動明王立像	多々羅区	多々羅	鎌倉	平成24年5月1日
60	市指定	美術工芸品	彫刻	木造阿弥陀如来立像	西念寺	田辺	鎌倉	平成24年5月1日
61	市指定	美術工芸品	彫刻	木造聖觀音坐像	来迎寺	松井	平安	平成26年4月1日
62	市指定	美術工芸品	彫刻	木造薬師如来及び両脇侍像	甘南備寺	薪	平安	平成26年4月1日
63	市指定	美術工芸品	彫刻	木造聖德太子立像	寿宝寺	山本	鎌倉	令和6年2月1日
64	市指定	美術工芸品	古文書	松井家文書	個人蔵	松井	桃山～大正	令和4年4月1日
65	市指定	美術工芸品	考古資料	石棒	山崎神社	山崎	繩文	平成5年4月1日
66	市指定	美術工芸品	考古資料	金環（山崎2号墳出土）	山崎神社	山崎	古墳後期	平成5年4月1日
67	市指定	美術工芸品	考古資料	武人埴輪（堀切7号墳出土）	京田辺市	田辺	古墳後期	平成6年10月1日
68	市指定	無形民俗		大住隼人舞	月読神社	西八		昭和50年12月19日
69	市指定	無形民俗		瑞饋神輿	棚倉孫神社	田辺		昭和53年10月1日
70	市指定	無形民俗		朔日講の神楽	白山神社	宮ノ口		平成5年4月1日
71	市指定	無形民俗		山本の百味と湯立	佐牙神社御旅所	山本		平成6年10月1日
72	市指定	史跡	古墳	菜師山古墳	京田辺市	飯岡	古墳	平成5年4月1日
73	市指定	史跡	古墳	ゴロゴロ山古墳	京田辺市	飯岡	古墳	平成5年4月1日
74	市指定	史跡	古墳	シオ1号墳（平塚）	京田辺市	天王	古墳	平成5年4月1日

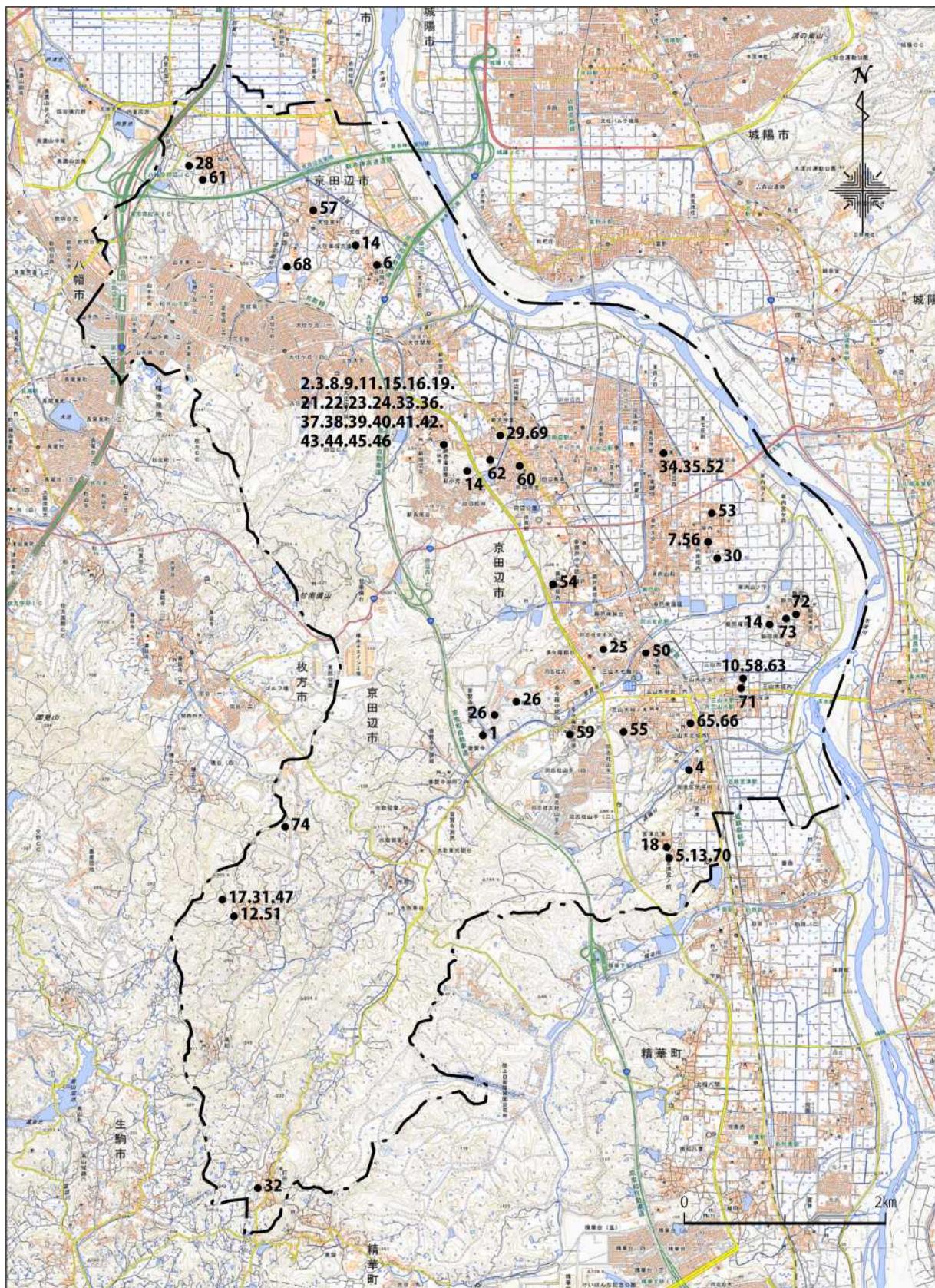


図 33 市内指定文化財位置図(令和 6 年 11 月時点、国土地理院標準地図 一部加筆)

※ 一部考古資料及び古文書については京田辺市等の公的機関にて保管しているため図示を省略した

第4節 社会的環境

(1) 人口

① 総人口の推移

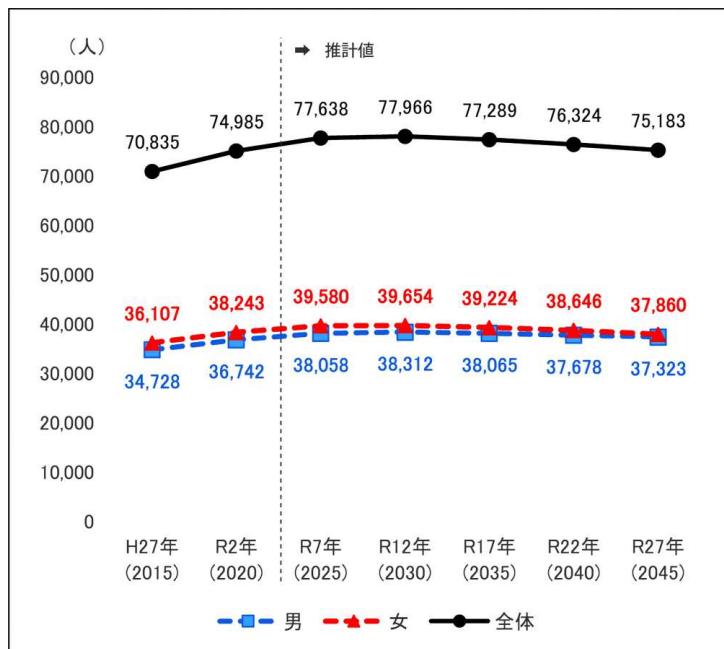
本市の人口は、昭和40(1965)年以降、北部地域における大規模な住宅地開発などにより急激に増加した。近年では、多くの市町村が人口減少に転じている中、本市は現在も増加傾向にある。

市の独自推計では、人口増は令和12(2030)年まで続き、約78,000人まで達した後、緩やかに減少すると想定している。

② 年齢構成別人口の推移

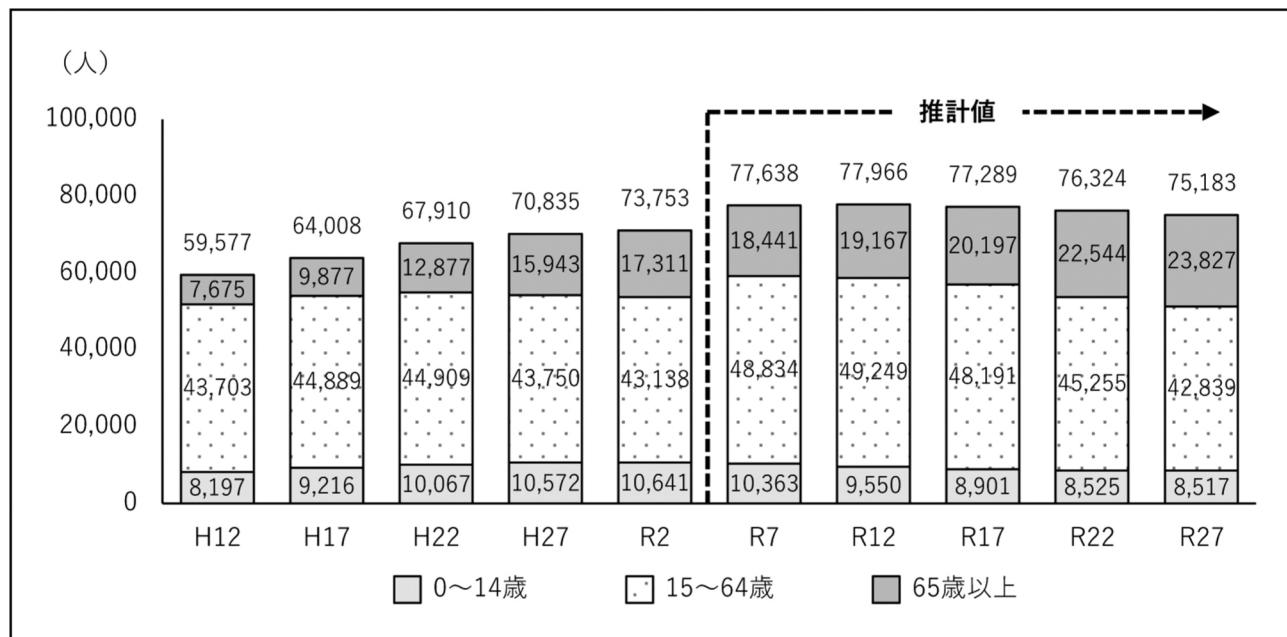
年少人口は、田辺町合併前年にあたる昭和25(1950)年から昭和40(1965)年までは漸減、以降は1970年代の「団塊ジュニア世代」の誕生により増加し、昭和60(1985)年にピークを迎えたが、その後は再び減少に向かった。平成7(1995)年からは増加に転じたものの、平成17(2005)年には老人人口を下回った。

表5 総人口の推移



資料：『第2期京田辺市まち・ひと・しごと創生総合戦略』

表6 年齢3区分人口の推移



資料：総務省「国勢調査」、京田辺市『第2期京田辺市まち・ひと・しごと創生総合戦略』

生産年齢人口は、昭和 40(1965)年から平成 12(2000)年まで急激に増加し続け、その後は緩やかな増加となり平成 22(2010)年にピークを迎え、平成 27(2015)年には減少に転じた。しかし、令和 7(2025)年に増加に転じ、令和 12(2030)年まで再び増加すると想定している。

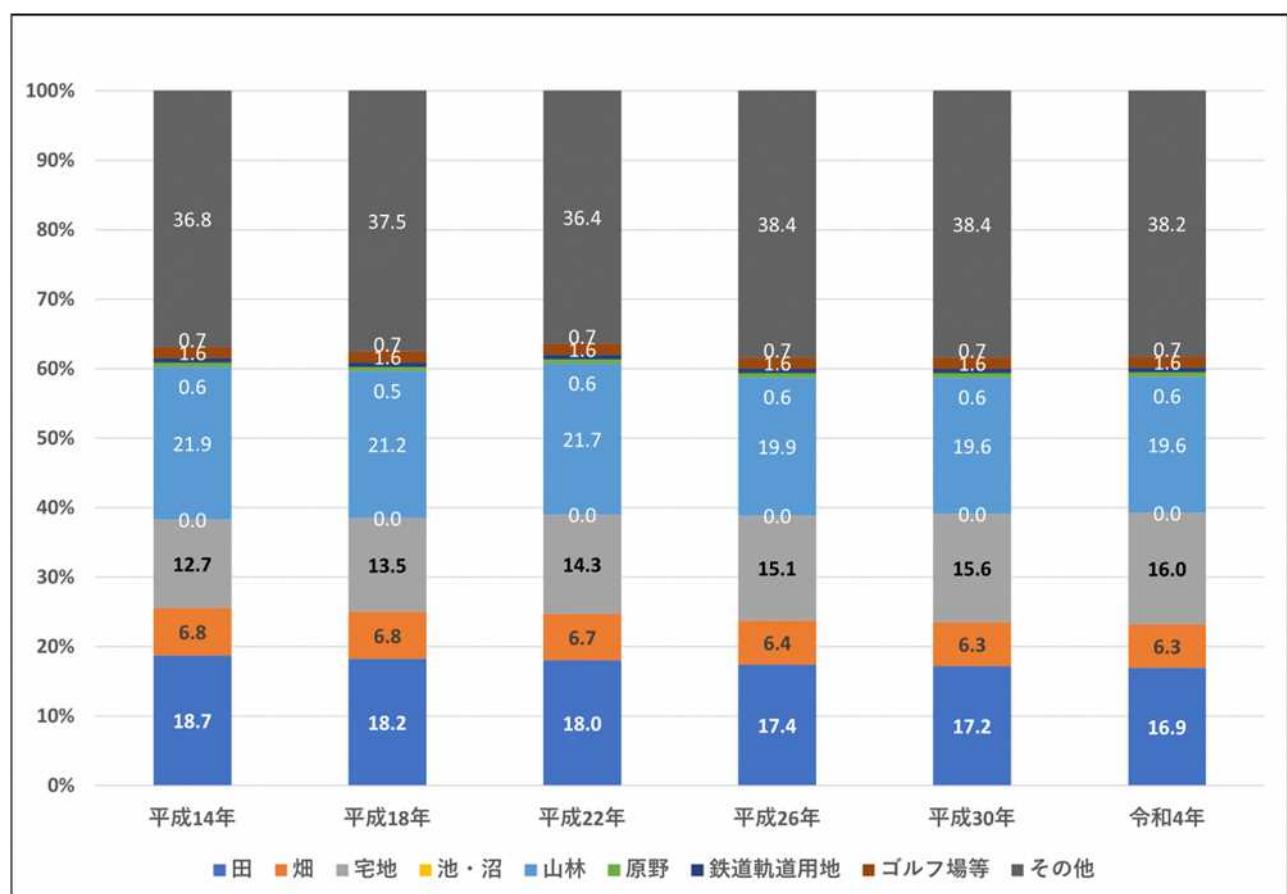
老人人口は、昭和 30(1955)年以降、増加の一途をたどっており、その増加率は近年高くなっている。しかし、高齢社会(老人人口比率 14~21%)に入ったのは、全国より遅い平成 17(2005)年(全国は平成 7(1995)年)となっている。

(2) 土地利用

本市の総面積は約 4,292ha であり、土地利用別の面積としては田畠などの農地が全体の 23.2%を占め、次いで山林が 19.6%、宅地が 16.0%である。平成 14(2002)年と令和 4(2022)年の土地利用状況を比較すると農地が 2.3 ポイント、山林も 2.3 ポイント減少しており、反面宅地は 3.3 ポイント増加しており世帯数の増加を反映している。

史跡指定地の周辺の土地利用については、大住車塚古墳の周辺は田畠であるが、天理山古墳群の周辺は住宅地となっており、飯岡車塚古墳は住宅地が一部隣接している。

表 7 土地利用の変化



資料：京田辺市『京田辺市統計書(平成 14 年度～令和 4 年度版)』

表 8 土地利用状況の推移

	田	畠	宅地	池・沼	山林	原野	鉄道軌道	ゴルフ場	その他	合計(ha)
平成 14 年	805	292	547	1	942	26	30	70	1,581	4,294
平成 18 年	783	290	578	1	909	23	29	70	1,611	4,294
平成 22 年	774	286	615	1	932	26	29	70	1,561	4,294
平成 26 年	748	273	648	1	853	25	29	70	1,647	4,294
平成 30 年	740	270	669	1	841	25	29	70	1,647	4,292
令和 4 年	727	269	688	1	843	25	29	70	1,640	4,292

資料：京田辺市『京田辺市統計書(平成 14 年度～令和 4 年度版)』

(3) 産業

本市の農業は、玉露やなす、たけのこ、「京のブランド产品」の認証を受けたえびいもといった全国でも高い人気を誇る特产品があり、特产品的ブランド化や品質向上の支援などを通じて農業の活性化を図っている。

商工業については、企業間交流の促進や高速道路ネットワークのハブ的な立地、関西文化学術研究都市の特色を生かした产学連携による新産業創出など持続的に産業が発展できる環境整備により安定した雇用の確保に努め、産業の活性化を図っている。

観光では、「お茶の京都」の取組みや温浴施設開業などで、観光入込客数が順調に増えている。歴史・文化資源や京田辺玉露などの市特产品を生かした魅力ある観光振興を図るとともに、広域観光ネットワークの形成と、参加・体験型観光の充実など、新たな観光資源づくりや京田辺の魅力の P R を進めている。



図 34 えびいも



図 35 飯岡の茶畠